

武蔵野日曜聖書講筵 聖霊降臨祭

聖霊の光

——ルカ伝第12章49～50節——

1992年6月7日

小池辰雄

魂の癌 聖霊という火を投ずるために来た キリストと交わりの世界に入りなさい 自分の信
仰には絶つしろ いつ仆れたってアーメン・ハレルヤ キリストは神の現象体 キリストが本
当の太陽 キリストは本当の無者 結論は聖霊の世界 キリストに寄りかかって話している

【ルカ12】

49 我は火を地に投ぜんとして来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。50 されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。

●魂の癌

クリスチャンにとっては、クリスマスと復活節と聖霊降臨節——私は、今日は「聖霊降臨祭」なんて書いたけれども——これは三大節ですが、我々の魂そのものにとつては、この聖霊降臨が一番大事なときです。そういう意味で、今日は是非ともその現実に入っていたきたい。私は説明はしません。告白をいたします。いわゆるお説教ではないですから。

キリストが言われた言葉の中で、今日にかかわる一番大事な言葉は、ルカ伝の12章49、50節の言葉です。

「49 我は火を地に投ぜんとして来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。50 されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。」(ルカ12・49～50)

大変な言葉です。

「地に火を投ぜんとして来た」

と。火というのは聖霊のことです。

「聖霊を投ずるために来たんだ」

と。今日の標題は「聖霊の光」ですが、火がなければ光は出ない。太陽は驚くべき火です。それから光がくる。

日本は太陽を国旗としている。その国旗の本当の味をいい加減にしているようでは、日本人は本当にしようがない。ドイツの世界的な大詩人ゲーテは、



「私は太陽の前に拝跪^{アンベータン}（○）する」

とまで言っている。我々は自然的存在としては、太陽がなくては在り得ない。だから、太陽を神さまのようにして拝む人たちもいるわけだ。結構でございます。日蓮は太陽を拜んで、それで日蓮宗ができた。

地球と生きとし生けるものは太陽に絶対に依存している。太陽がなければ地球はどうにもならん。その地球を人類は我欲のために何のかんのやっているうちに自然を壊してしまつて、今頃になつて地球的なグローバルな問題として、自然を考えなければならなくなつた。本当はもう遅いんだ。植物がだんだんまいってきた。ドイツの有名な森林も枯れてきた。酸性雨が降ってきて日本でもその影響が出てきた。もとをただせば、これはみな原子爆弾から来てます。原子爆弾の処理の仕方がない。どこへ棄てるんですか。

とにかく、人間の科学的な知識の進歩は素晴らしいけれども、それに慾がからむから、とんでもないことになる。慾がなければいい。アインシュタインだつて、なにも地球をおかしくするために、あの驚くべき発見をしたり発明をしたりしたわけではない。人間の慾というのは、エゴイズムというのはしょうがない。癌より悪い。人間の病気で一番やっかいなのは癌でしょ。しかし、魂の癌はもつと悪い。それが人殺しをしたり、社会的な様々な問題を起こしたり。議会政治なんてやっついていて、あんな調子な事をやっているんだから。とにかく、人間というのは救いがたい、お互いさま。どうにもならん。

いくら禅宗で悟つてみたって、ダメなんです。だから、キリストやお釈迦さんが出てきた。キリストやお釈迦さんが出てきたけれども、それでもダメなんだ。どうにもならん。だから、「万人は罪びとである」

というのはそのことなんだ。「罪びと」というのは、どんな罪を犯したということではない。

「我執にとらわれているエゴイズムの人間だ」

ということが罪びとということですよ。

「己を愛するは最も悪いことだ」

と、西郷南洲も言っている。

「ひとを愛せよ」

というのは、

「ひとを助けてやれ」

ということ。かわいがるということではない。「ひとを助けなさい」ということです。

助けるどころでない、本当に救うところまで来て、本当の救いをもたらしたのが、このキリストというひとなんです。だから、キリストの救いに来たら、あと他はもうどうでもいい。余計なことを考えなくていい。いろんな事を考えてゴタゴタゴタゴタしているんだ、一番大事な救いをすっかり受けとらないものだから。今日は、その救いをすっかり受けとってくださいよ。私自身も受けとりますから。



●聖霊という火を投ずるために来た

それでキリストは、

「聖霊という火を投ずるために来たんだが、しかし、自分には受くべきバプテスマがある」

と。これは水のバプテスマではない。火のバプテスマでもない。キリストのバプテスマは、他の人が誰もできないバプテスマ。自分の血です。自分の血を流すこと。自分の血を流して、自分の血を浴びること。これが十字架の血潮という、「罪の贖い」ということ。

旧約聖書では、当歳の疵きずのない小羊を屠ほぶつて罪の贖いの徴をやったわけだ。けれども、動物のそれをいくら繰り返したって同じことだ。ところが、キリストはただ一回——ヘブル書に書いてある——自分の身を献けんげて罪を贖あがなった。これは神さまから言われた。

「お前は人の罪を全部、背負しよえ。旧約聖書の本当の精神をお前自身がやれ。自分が羔こひつじとなり、自分が大祭司となれ」

と。これをキリストは一身に引き受けてしまった。これが、

「思い逼せまること如何許いかばかりぞや」

ということ。そのバプテスマとは十字架の死のことです。キリストはいきなり天界に行ける霊ひと止となんだ。

旧約のエリヤという人はいきなり火の車に乗って天界に行ってしまった。エノクは神と三百年一緒に生きていたら、死なないで見えなくなった。そういう例も旧約にはある。いわんや、キリストは霊化れいかしてしまつて、いきなり天界に行けるひとだ。けれども、

「お前は十字架の贖罪を、羔こひつじとなつて贖罪を果たしたら、そうしたら、天界に来な

なよ」

ということなんだ。だから、十字架を抜きにして、キリストの道はない。

「キリスト教」ではない。普通、キリスト教というけれども、これは教訓おしえではない。キリストはなにも教えてない。彼は告白こくはしている。お釈迦さんも教えてない。お釈迦さんも告白している。やむにやまれない自分の体験を語っているだけのはなし。だから、私は「教師」という言葉が嫌いだ、50年間さんざん教師をやってきたけれども。

「本当に教えることは本当に学ぶことだ」

という言葉もあるくらいです。いわゆる教えではない。

皆さん、身体で聞いていてください。頭で聞いていたらダメですよ、私の話は。全身で聞いていてください。私は全身で語っている。頭でものを言っているのではない。

だから、

「その十字架でもつて、一切を問題のない世界にしてやった」ということです。



●キリストと交わりの世界に入りなさい

福音書を楽しく読んでくださいよ。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ。聖書の中心は何といっても福音書です。キリストの言ったり、したりした事が全部ここに――全部と言ったって、まだ載りきれないほどたくさんあるんだけれども――書かれています。とにかく、無駄がない。不思議なものです。新約聖書というのは本当に無駄がない。旧約には無駄がたくさんある。新約をしっかりとつかんでいなくて、いきなり旧約を読むと、反って躓く。イスラエルの歴史は滑ったり転んだりしている歴史だから。ところが、新約では、キリストの証人の本当に証しているところの言葉の展開だから、大変なものです、新約聖書というのは。どんな文学でも新約聖書には内容的にかなわない。シェークスピアといえども、ゲーテといえども。

「そんなに素晴らしいものか」

と、早く気が付いてくださいよ。私は新約を読むと、楽しくてしようがない。本当の世界は楽しい世界です。しかめつつらしている世界ではない。楽しみの為に楽しむのではない。おのずから楽しくなるわけです。だから、「福音^{ふくいん}」というんだ。「楽音^{らくいん}」とまったくいい。キリストの楽音。ところが、この楽しさは遊んでいる楽しさとは違う。仕事をしてやまない、人を助けてやまない。

自我が立つと、どんなにそれが良さそうに見えても、必ずダメになります。

「その自我は私が全部引き受けたから心配するな」

というのが、この「十字架の贖い」ということ。過去・現在・未来の私、相対的人間小池は、死にいたるまで罪びとだ、しょうがない者だ。けれども、そのしょうがない者の奥に、誰が何と言ってもこれを侵すことのできない驚くべき世界が来ている。これが「救い」という。心の単なる自覚ではない。これは事実です。キリストがくださった事実なんだ。賜りたる事実を受けとるだけのなしただ。

「ありがとうございます」

と、平伏して受けとるだけ。これを「救い」という。

「まだなかなか私は救われません」

なんて、よく言う。何を言っているか。キリストが救っているんだ、もう完全に。「救われません」とは何ぞことだ。人間の側の一切の事ではないですから。いいですか。

「ああ、そうでしたか」

と。そうなんだ。

「まだ私は信仰が足りない」

なんて、いつ足りるんですか。信仰なんてものを何ものかと思っっているから、おかしいことになる。

私みたいな、こんなことを言う牧師さんはいないだろうね、おそろく。

「信仰なんか何だ」



と言っているから。

「だって、キリストは『汝の信仰、汝を救えり』とおっしゃったではないですか」
 なんて、キリストの言葉に躓きなざるな。「汝の信仰」というのは、

「お前がかくも私を完全に受けとっていることが、それが救いとなったよ」

ということなんです。「信仰」という言葉が躓きになる。困ったものだ。初めの人は「信仰」といつて、初めは信じ仰いだかも知れませんが、いつまでも仰いでいてはダメです。だから、私は「信交」と書く。

「キリストと交わりの世界に入りなさい」

ということですよ。

「私はキリストの中に居ます、キリストは私の中に居ます」

という、その内在関係、内住関係です。だから、

「イン・クライスト」(英)

「エン・クリスト」(ギ)

「キリストの中に」

という。それは、どこから来たかと言うと、パウロの信交の事態がいつも「イン・クライスト」なんです。パウロも、ヨハネも、ペテロもそうです。

「私はキリストの中に居ます、キリストは私の中にいらつしやいます」

という、霊的な現実なんです。「信ずる」というのではない。現の世界、うつつの世界です。現実なんです。本当の現実。根源現実と私は言いたい。根源の現実はそういうところにある。救われていることを本当に受けとっている事態です。もう私は異言が出そうになって困る。

●自分の信仰には絶つしろ

使徒行伝2章4節の「異邦の言」というのは異言のことです。天的な発音です。

そういう現の世界です。

「夢か、現か」

なんていうが、夢の世界でも本当の現の中に入る。そういう夢を私は時々みる。

「信仰うすき者よ」

なんてキリストが言われるものだから、

「もつと厚くしなければいかん」

なんて思う。だから、キリストやパウロの言葉にも躓くんです。ただ文字面の意味を考えるものだから。キリストはその時はそう言ったかも知れないけれども、本当は

「信仰なんてものは問題するな。自分の信仰には絶つしろ、絶信しろ」

と。絶信の信ということ。この信は上からくる信です。信も愛も望も全部、上からくる全部、上から、霊界から受けとる。我々が祈れるのも、実は上からの力で祈っている。



仏道でいうと、浄土宗、浄土真宗だ。絶対他方の世界だ。私は、もし、キリストでなかったならば、浄土真宗だね。親鸞が大好きだから。宗派根性はないですよ。およそ、そこに本当のものがあれば、私は何でもとっつかまえてしまうから。キリストという霊止ひとは全部それを包摂できる。キリストの世界は凄いから、廣大無辺だから。

「かくねんむしよう
廓然無聖」

という言葉がある。

「広々として、聖きよいの聖くないのと区別している世界ではないぞ」

という意味だ。「まだなかなか潔まりません」なんて、そんなことを問題にするな、ということですよ。

「わが語りし言によりて汝らは既にきよ潔し」

と、キリストはルカ伝15章で言っている。なぜ、キリストはそんなことを言われるかという、

「私の言葉を本当に身体からだで受けとってみろ、そうしたら、天的な聖なる世界に入っているんだぞ」

ということなんだ。キリストは語ったことが全部、相手において現実となるという、そういう角度からものを言っている。そのうちにこうなるだろうなんていうのではない。

口語訳聖書で、

「…であろう」

なんて書いてあると、私は口語訳聖書なんか読む気がしない。気が抜けてしまう。全部、「…である」

の世界です。現在の世界です。過去のマイナスもプラスにしてしまうし、将来の希望も全部現実にしてしまう。永遠の現在というものを生きていく。

●いつ仆れたってアーメン・ハレルヤ

私はいつ仆れたっていいんだよ、

「アーメン・ハレルヤ！」

だ。必ず、或る一つの詩を書く。もうかなり進んでいる。けれども、その詩が書けなくたって差し支えない。人間のすることは決して全きことはない。全部、これは未完成です。未完成交響楽なんだ、本当は。ただ問題は、未完成でありながら、

「永遠性を持っているか」

ということだけが問題なんです。不滅性、永遠性を持つていれば、どこで仆れたっていいんだ。仕事はどこでお終いになったっていい。そのやっている事に永遠性、不滅性があるかないか。これはキリストを受けとれば永遠性がくる、不滅性がくる。

神さまは決して飢えさせません。味噌汁飲んでたくわん食べていけば、大丈夫なんだ。反つ



てそういう人の方が長生きするくらいだ。栄養過剰でおかしなことになる。私の話の気合がわかるですか。

そういうようにして、

「もう自分は問題にしません、自分の信仰すら問題にしません。主さま、キリストだけです。既に自分の自我は全部すつとんでいる。それが十字架でした」

と告白せざるを得ない。十字架の絶対恩寵です。左顧右眄する必要はない。問答無用の世界です。

本当に十字架を受けとつて、

「我れキリストと共に十字架せられたり。もはや我れ生くるにあらず。キリス

トわがうちに在りて生き給うなり」

と、パウロの有名なガラテヤ書2章20節の言葉です。さんざんパウロはキリストに逆らっていた。そうしたらば、復活のキリストにダマスコ途上でパウロ（サウロ）はひっくり返された。

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか！」

と。サウロはキリストの弟子たちをとつ捕まえて牢屋に入れて殺すことまでやっていたものだから、とんでもない野郎なんだ、殺人犯なんだ、もともと。それがユダヤ教のチャンピオンだ。

だから、ユダヤ人というのものはもの凄い頑かたくな民なんだ。「頑かたくなる民」ということを自分でも言っているくらいだ。頑固なんだ。

「アラブもエジプトもイスラエルも、もはや全部これは神さまのものだ」

ということがイザヤ書に書いてある。

「イザヤ書をしっかりと読め」

と言いたいくらいだ。旧約聖書のイザヤ書というのは凄い。

皆さん、第一流のものを、焦点となるものをしっかりと身につけなければダメですよ。そうしたら、あとはどうでもいい。「どうでもいい」ということは、

「そうすれば他のどんなものも本当に評価できる」

ということなんです。言葉というものは、気合で言うと、躓く。

「どうでもいいか、それなら私は何もしない」

なんて、そうじゃない。

「本当のことがでてるぞで」

ということです。言葉を言うと、或る一つの限定的なことになるから、躓く。だから、

「最後は何も言わないのが本当にいい。表現しきれないから、私は黙りこんでしまします」

ということになる。その沈黙の言葉が本当に読めるようになったら、それは本当の世界です。



語ろうと思ったが、お互いに黙って、目と目を合わせるだけで、

「あなたの心は全部読めましたよ」

と。本当の世界というのはそういう世界なんです。

中世の神秘家というのは大体そういう世界をつかまえている人たちです。ただ、神秘家たちが神に直結しようとしたところに、ちょっと危険なところがあった。キリストという驚くべき媒介——媒介と言ったって、キリストという媒介はいわゆる哲学的な媒介とは違う——を抜きにする傾向がある。

●キリストは神の現象体

神さまは見えない。望遠鏡にも顕微鏡の下にも神さまは出てこない。神さまは無相の世界です。相が無い。だから、

「神なんかいるか」

と、無神論になることが多い。論はいくら論じたっていい。議論で片がつくような世界は高が知れている。

無相の神さまを、キリストは、

「父よ」

と言った。そうすると、

「神さまはお爺さんかな」

なんて、そうじゃない。「父よ」という言葉は暗号なんです。暗号だけでも、キリストにとっては、のっぴきならないところの表現です。地上においては、キリストは神さまを「父よ」と呼んだ。

ヨセフというお父さんがいたが、ヨセフのことは一言も言っていない。ヨセフはどんな大工であったか、どんな建物を建てたか、なんて一つも書いてない。どんなお手伝いをしたか、そんな事も一つも書いてない。

「父よ」というのは、なんで「父よ」か。しょっちゅう、キリストは祈り入っていた。お願いではない。祈り入る。神さまの中に祈り入っているんです。懐の中に入ってしまった。小さい乳飲み子がお母さんのふところの中に入ると同じことだ。

その名状することのできない神は宇宙を創造した。

「そんなことがあるか」

と、自然科学的にはそうでしょう。自然科学的には、「神は在る」なんて言ったら、反ってそれは間違いだ。自然科学的な判断からいえば、神さまなんか有りはしません。

ところが、それと次元の違った世界に入ると、神は在らざるを得ない。その在らざるを得ないところのものを、キリストは

「父」



と言った。仏教の世界では

「如来」

です。何だっついていいよ。

「梵」

だっついていい。そういう、何と言おうが——

「名前は煙の『ことし』」

なんてゲーテは言っているけれども、

「名前は何と言おうが、本当の实体は表現できないから、名前そのものは煙のよう

なものだ」

と、そういう意味で彼は言った——その在らざるを得ないところのものを、キリストは「父よ」と呼んだ。イスラム教では「アッラー」なんていつている。

では、どこに一体、神さまを見たらいいか、というと、我々は福音書のキリストを見ればいい。キリストは神の現象体だから。「父よ」と言ったら、自分は「子」なんだ。

「神の独子」ひとりご

なんていう言い方をしている。

「では、母はどうしたか」

と、そんなことは考える必要はない。宗教の世界の言葉は、普通の常識的な判断でやったらダメです。

もう私はキリストの十字架で贖われてしまつて聖霊が来てしまつたから、「神さま！」なんて言わないで、

「主さまー」

と言つて、キリストのことを、

「わが主」

と言つて祈るのが一番簡単だから、私にとっては「主さま」だ。

「主さまー」と、沈黙の叫びをする。直ちにキリストの中に入つてしまふ。本当ですよ。だから、力が来るんです。88歳にもなつて、普通の青年よりもつかい声を出すだろ。力が来てしょうがないから。仕事が終わるまでは、多分、百歳を突破するでしょうね。使命のある限り、神さまは生かしておく。使命がなくなつたら、置いとかない。寝たきり老人なんかには絶対ならないつもりだからね。

●キリストが本当の太陽

日本は困つたものだ。なにしろ、「民主主義」なんて言っているから。主義と言うなら、神主主義でなければダメだ。神さまを主にしないで、「民主、デモクラシー」なんて言っているからダメなんだ。



「アンダー・ゴット」

「神の下における」

の民主主義ならいい。神さまをいい加減にしておいて、そして「民主、民主」と言っ
て、身勝手主義になってしまっ
て、日本はいつまでたつてもダメだ。アメリカでもドイツでも、
彼らは何といつてもキリスト教国なので、違うんです。歴史的な伝統を持つて
いるから、立ち帰る所をもつて
いる。

ところが、日本は立ち帰る所が、どうも、ありそうでないようだ。「あまてらすおおみかみ天照大神」か。「天照大神」
で良かったらどうぞ。でも、「天照大神」というのは素晴らしい名前だ。太陽から
きている。太陽神だ。だから、自然に国旗が太陽になった。

私は国旗が好きだから、元日と二日、三日と三日間、国旗を門に掲げつぱなしだ。

「あの野郎、国粋党か」

なんて。逆に、

「お前たちは日本人か」

と言いたくなる。自分自身が太陽にならなくてはダメなんだ。

「汝らは世の光なり」

と、キリストがおっしゃったのは、

「お前たちは太陽になれ」

ということだ。

「私が本当の太陽だ」

と、今度はキリストがそう言うんだ。

「私が本当の太陽だから、私の光を受けとつて、光を発しろ」

と。聖霊も光も同じことだ。漢字というのは素晴らしい。「光」という字は太陽から
きている。とにかく、十字架を本当に受けとる。瞑想して、そこで祈り入つて
ください。これは一人
でやらなければダメです。教会でただ祈つていたつてダメなんだ。教会の
祈りが悪い、なんて言っているんじゃない。一人でじつと、明け方でも夜中
でもいい、静かな時に本当にキリストの中に、十字架を受けとつて
ください。

「我れキリストと共に十字架せられたり。もはや我れ生くるにあらず。キリス
ト、聖霊のキリストが私の中に来てくださった」

と。本当に十字架を受けとれば、必ず聖霊はくるんです。何も聖霊を求め
なくてもいい。本当に十字架を受けとつてごらん。必ず聖霊は来るから。

「聖霊を求めらつて、どうやって求めるんですか？」

なんて、どうやってもへつたくれもない。

「十字架を本当に受けとれ」

と。ところが、十字架を本当に受けとつてないから、聖霊が来てないんだ、
みんな。



だから、キリストの直弟子の、使徒的な次元に、我々はどこまでも追求していく。限りなく入っていく。ここでいいという所はない。さつきから言っている無限性、永遠性です。何をしても、皆さんのすることは永遠性を、無限性を持たなければダメなんです。無限性を持つためには、聖霊が来れば無限性になる。聖霊は無限性を持った霊ですから。学問をしようが、台所の仕事をしようが、何をしようが、創造的になる。別な言葉で言うと創造性だ。アインシュタインでも、エジソンでも、あれは生まれつき、そんなに秀才ではなかった。ところが、この創造性が展開をはじめた。

落ちこぼれなんていうのは一人もいない。一人ひとりみんな神さまから賜った大事なものがあつた。その焦点にキリストの霊が触れてみる。それから、本当にそれが動きだすから。そうして、本当に生きるから。光だすから。そして、自然に人を助けることになる。

●キリストは本当の無者

それが、自分の方では、もう「無我」です。我れはない。無私無我。相対的人間小池は私があります。けれども、その奥に私が無い世界がちゃんとある。ここに聖霊があつて動きだしているから。これ（聖霊）が力を持っている。だから、私は行き詰まらない、絶対に楽しくてしようがない。

「ああ、今日は疲れました」

なんて思うことはない。眠くはなるけれども、

「今日は疲れちゃった」

なんて思うことはないんだ。それだから、

「無者」

です。キリストは本当の無者です。私が無かつた。

「私は何もできないよ、神さまがさせているんだ。私は何も教えているのではない。神さまが言えといっていることを言っているだけの話だよ」

「善き先生」

と言ったら、

「なぜ、私のことを善いと言うか。神さまの他に善いものがあるか」

と、これはみんなキリストの言葉ですよ。ああいうキリストの言葉をしっかりと掴まなければダメです。何を読んでいるか、と言いたくなる。いわんや、私たちは自分をサムシングにしたってダメなんだ、そんなサムシングは。蛍光灯が光っているけれども、太陽の光にかなうかと言う。我々の光は蛍光灯みたいなものだ。けれども、太陽の光を受けて、それを反射する、お月さんみたいに。

だから、私は虹が好きだ。水滴は無色透明です。太陽の光も無色です。無色の光が無色



透明の雫にくると、これが七つの光に——七つどころじゃない——光を発する。私はなぜ自分の雅号を

「天弓」

と言うかというと、天の弓とは虹のことです。

「虹のように神さまの栄光を、真理を証していくぞ」

と。また、

「天鐘」

というのは、梵鐘にはベルがない。これは上から吊るされている。これを打てば、ゴーンと鳴るのはこの中の空気とまわりの空気と鐘だ。ベルがあつて、中でジャランジャランと鳴るような、ヨーロッパの鈴とは違う。だから、仏教の梵鐘というのは素晴らしい。それから来て、私は「天鐘」という号をつくつた。天的な鐘の音だぞと。

「天」は「地」と接しています。天地融合の世界に入る。ひとつも分析していない。全部、焦点をもつて総合されていく。本当の中心です。そうすると、無限の空間は円で表すしか仕方がない。だから円現という。

とにかく、十字架を本当に受けとつたら、もう皆さんは、こうやって聞いているうちに、

「何だか知らないけれども、身体が熱くなった、楽になった、楽しくなった、力が

来た」

と思つたら、もうそれは聖霊の世界ですよ。聖霊が来ている世界です。

「聖霊はどれだ」

なんて、見えるかと言つんだ、そんなもの。

「小池先生は楽しくしゃべっているが、私はなかなか楽しくならない」

なんて、そうじゃない。一緒に楽しくなつてください。一緒に楽しくならなくては。

「ええ、私も楽しいです」

と言つてくれなければ。

●結論は聖霊の世界

クリスマスを迎えようが、復活節を迎えようが、全部、結論は聖霊の世界にくる。

それだから、あなた方は、このペンテコステで本当に十字架を受けとつたら、

「聖霊は自然に来ました」

と、これが本当なんです。十字架を抜きにして、聖霊なんて言つたつてダメです。「聖霊、聖霊」とやっついて、十字架を抜きにしたら、今度はサタンに襲われるよ。

「私は霊的になつた」

なんてやって傲慢になると、これはサタンの霊だからサタンに切り替わる。天使の中で優秀な天使が「神さまの如く」と思つたら、これがサタンになつてしまった。「ルチフェル」



というやつだ。イザヤ書に出ている。天から墮ちた。ミルトンにも書いてある。傲慢は一番いけない。平伏ひれふしの魂でない」と。

平伏しの魂にされる。キリストの十字架の贖罪の恩寵は、これを無条件に受けとるときには、平伏しだから。高慢な気持で受けとれるか、というんだ。

「参りました!」

と降参している。そうすると、今度は立たせられる。立っているときには、もう聖霊の力で立っている。

十字架をいい加減にして、「聖霊、聖霊」と言つて、ワツシヨイワツシヨイとやっているグループも無きにもあらず。ダメだよ、それは。本当の祈りは、ただ独りで深く沈黙で祈っているとき、これが一番深い祈りになる。一番キリストに直結する。

そうすると、「十字架のヨハネ」みたいになる。彼は

「お前は異端だ」

と言われて牢屋に入れられてしまった。ほとんど光がない、真つ暗な牢屋の中で瞑想して祈っているうちに、本当の光が射してきた。

「何とありがたいことだろう、闇の世界が本当の光の世界だった」

という。神さまの光が、キリストの光がやってきた。それで、知らない間に牢屋から出てしまった。どうやって出たか知らない。ペテロやパウロがそのようにして――使徒行伝に書いてあるでしょ――天使がやってきて自然に鎖が取れてしまったり。あれは全部本当ですから。そういう不思議な事が起きるんだ、キリストの世界は。

自分なんかどうでもいいから、もう無に、無我の世界にされているんだから、

「いや、ありがたいです、主さま!」

と言つてごらん。その

「主さま!」

と唱えたその瞬間に、もう聖霊の世界に入っている。そうですよ。ちつとも難しくない。

十字架をいい加減にしている、聖霊なんて言つたつてダメだ。そして、熱っぽく祈つたつてダメだよ、そんなのは。くたびれてしまふ。ご苦労さんなはなしだ。いいですね。

こんなことを言うやつは他にいないのかも知れないな。だけど、私はウソは言つてない。本当のことを言っている。仕方がない、力が来ているんだから。

●キリストに寄りかかって話している

私はこうやって、柱に寄りかかっているでしょ。どこによりかかっているか。キリストによりかかっているんですよ。キリストにいつかかかって皆さんに話している。讚美歌を歌うときに、あそこでもつてよっかかかっている。

「先生はくたびれているのか」



と、そうじゃない。キリストによっかかって話している。そういうもんなんだ、私のすることはみんな。

ソクラテスなんていうやつも、あれも凄いやつで、酒飲んだって決して酔わない。そして、三日も歩哨で立っている。凄いね、ソクラテスという人は、やっぱり「ダイモニオン」の、霊の力でもって動いている。大体、第一級の、あるいは超一級の人物はみんな神霊との交わりを何らかの意味で持っている。日本の教育は、教育者がそういう境地に入らないで本当の教育ができるか、というわけだ。

ああ大体、時間になった。それで、結局、聖霊の話はしないでしょ。十字架の話を本当にして、本当にこれを受けとったら、聖霊は来るから、聖霊のことを言わないんだ。いくらでも聖霊のことは書いてあるけれども、聖霊のことを言うのをやめた。言う必要がないんだ。もう、あなた方はきているから。

言葉というのは困る。すぐ、躓きになったり、誤解になったり。ゲートルが言っている、

「大体、人間関係は誤解から始まっている」

と。だから、人の言うことは善意で、善意をもつて解釈しなければいけない。善意ということは大事なことです。人のやることも、することも、善意をもつて受けとっていく。そうすると、相手が、

「そうか、そんなに善くもつてくれたか。私が悪かった」

と、反って今度は、相手の方が頭を下げる。そういうもんですよ。だから、

「愛は一切に勝つ」

とはそのことです。本当に人のためにを思つて、人のためにすることは、これは一切を救つていく。勝つとは相手を救い上げるということです。

この私の話全部が、これが聖霊の響きの話です。だから、「について」語る必要はないんです。

「なるほど、先生の話は聖霊だった。おしまい」

と。では、これでおしまします。

